

令和7年度 強度行動障害支援者養成<基礎>研修 1日目テキスト

研修資料

	ページ
【オリエンテーション】研修の狙い	1
① 【講義】強度行動障害の理解 —支援の基本的考え方 —強度行動障害の状態 —行動障害が起きる理由	9
② 【講義】強度行動障害の理解 —障害特性の理解	38
③ 【演習】強度行動障害の理解 —困っていることの体験	73
④ 【講義】支援のアイデア —障害特性に基づいた支援	104
⑤ 【講義】実践報告 —児童期及び成人期における支援の実際	資料なし

【オリエンテーション】研修の狙い	1
------------------	---

オリエンテーション 研修の狙い

和歌山県障害福祉課

※本資料は、令和7年度強度行動障害支援者養成研修（基礎研修（指導者研修））の資料を基に作成しています。

「強度行動障害」に関する対象者の概要

「強度行動障害」とは

自分の体を叩いたり食べられないものを口に入れる、危険につながる飛び出しなど本人の健康を損ねる行動、他人を叩いたり物を壊す、大泣きが何時間も続くなど周囲の人のくらしに影響を及ぼす行動が、著しく高い頻度で起こるため、特別に配慮された支援が必要になっている状態のこと。

「支援の対象者」については

障害福祉サービスを受ける際に行う障害支援区分の調査に併せて把握する「行動関連項目」（障害児の場合は「強度行動障害判定基準表」）の合計点数が10点以上（障害児は20点以上）の場合に対して手厚い支援（下記の図参照）が提供される。

令和4年度に開催された「強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会」において、支援人材のさらなる専門性の向上、日常的な支援体制の整備と支援や受入の拡充策、状態が悪化した者に対する「集中的支援」の在り方等について提案された。

検討会報告も踏まえ、令和6年度報酬改定では、受入拡大や支援の充実の観点から、新たに行動関連項目18点以上（障害児は30点以上）の場合のより高い段階の加算や、状態が悪化した者に対するアセスメントや環境調整を行う「集中的支援」に係る加算を創設する等の対応を行った。

行動障害関連の障害福祉サービス・障害児支援の利用者

（国民健康保険団体連合会データ）

のべ122,525人（令和6年10月時点）

（行動援護、共同生活援助、短期入所、生活介護等を重複して利用する場合があるため、のべ人数としている）



重度訪問介護※1
1,413人



行動援護
16,224人



短期入所	重度障害者支援加算Ⅰ※2	7,603人（内、18点以上※3	18人）
	重度障害者支援加算Ⅱ	4,115人（内、18点以上※3	3人）
施設入所支援	重度障害者支援加算Ⅱ	26,301人（内、18点以上※3	205人）
	重度障害者支援加算Ⅲ	8,479人（内、18点以上※3	19人）

共同生活援助

重度障害者支援加算Ⅰ※2 8,171人（介護型6,913+日中S型1,258）
（内、18点以上※3 49人（介護型49+日中S型0）
重度障害者支援加算Ⅱ 7,154人（介護型6,167+日中S型987）
（内、18点以上※3 14人（介護型14+日中S型0）



生活介護

重度障害者支援加算Ⅱ 21,173人
（内、18点以上※3 71人）
重度障害者支援加算Ⅲ 16,405人
（内、18点以上※3 38人）

障害児入所施設

重度障害児支援加算※4	福祉型	148人；医療型 0人
強度行動障害児特別支援加算	福祉型	加算Ⅰ：13人・加算Ⅱ：3人
	医療型	加算Ⅰ：0人・加算Ⅱ：0人

児童発達支援

放課後等デイサービス

保育所等訪問支援

居宅訪問型児童発達支援

強度行動障害児支援加算	494人
強度行動障害児支援加算	加算Ⅰ：4,647人・加算Ⅱ：89人
強度行動障害児支援加算	93人
強度行動障害児支援加算	0人

（※1）利用者の内、知的障害者の数（平成26年度からは、重度訪問介護についても、行動援護等の基準と同様の対象者に対して支援を提供することが可能となっている）。

（※2）短期入所の重度障害者支援加算Ⅰ及び共同生活援助の重度障害者支援加算Ⅰには、区分6かつ、Ⅰ類型（人工呼吸器）、Ⅱ類型（最重度知的障害）、Ⅲ類型（行動障害）が含まれるが、その内訳は不明。

（※3）中核的人材を配置し行動関連項目18点以上の者を支援した場合に算定。

（※4）障害児入所施設の重度障害者支援加算は主として知的障害児・自閉症児を入所させる場合であって、強度行動障害支援者養成研修修了者を評価する加算を算定している人数。

強度行動障害支援者養成研修について

- 強度行動障害を有する者は、自傷、他害行為など、危険を伴う行動を頻回に示すことなどを特徴としているため、現状では事業所の受入れが困難であったり、受入れ後の不適切な支援により、利用者に対する虐待につながる可能性も懸念されている。
- 一方で、施設等において適切な支援を行うことにより、他害行為などの危険を伴う行動の回数が減少するなどの支援の有効性も報告されていることから、地域生活支援事業において、強度行動障害を有する者に対して適切な支援を行う職員の人材育成を目的とする体系的な研修を実施しているところ。

国立のぞみの園



都道府県



障害福祉サービス等事業所

サービス管理責任者クラスの職員



平成26年度～ 強度行動障害支援者養成研修
(実践研修) 講義＋演習(12時間)

支援現場の職員



平成25年度～ 強度行動障害支援者養成研修
(基礎研修) 講義＋演習(12時間)

（参考）強度行動障害を有する者への標準的な支援

（強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会報告書（令和5年3月30日）より）

○（中略）強度行動障害を有する者への支援にあたっては、知的障害や自閉スペクトラム症の特性など個人因子と、どのような環境のもとで強度行動障害が引き起こされているのか環境因子もあわせて分析していくことが重要となる。こうした個々の障害特性をアセスメントし、強度行動障害を引き起こしている環境要因を調整していくことが強度行動障害を有する者への支援において標準的な支援である。

課題となっている行動の例

- ・ 先の見通しが持てず何度も予定を確認する
- ・ 音に敏感で騒がしい部屋に入れない
- ・ 「拒否」が伝えられず他者を叩いてしまう など

本人の特性

自閉スペクトラム症や知的障害など個々の障害特性

環境・状況

困り感やストレスの要因となっている環境や状況

冰山モデル

見えている行動だけに着目せず行動の背景を考えることが重要
＊強度行動障害支援者養成研修より



標準的な支援

障害特性を踏まえた＊機能的アセスメントを行い、強度行動障害を引き起こしている環境を調整する

＊機能的アセスメント
課題となっている行動がどのような意味（機能）を持っているか調べる

アセスメントに基づく支援計画を立て、実施し、実施内容を評価して次の支援につなげる

予防的支援の重要性 （強度行動障害を有する者の地域支援体制に関する検討会報告書より）

- 予防的観点を込めて標準的な支援を行うことが必要
- 強度行動障害を引き起こさなくても良い支援を日常的におこなうことが重要
- 支援者、家族、教育等の関係者が、標準的な支援の知識を共有し、地域の中に拡げていくことが重要

強度行動障害支援者養成研修(基礎研修)(実践研修)の位置づけ

強度行動障害支援者養成研修(実践研修)

①アセスメント

行動観察・情報収集

障害特性の理解

行動の
分析
理解

・本人が困っていること
・本人ができる事、強み
・本人の特性
の把握

②支援の計画 (支援の手順書)

A. 本人の困難を軽減したり取り除く

B. 本人ができること、強みを活用する

※ 支援計画は場面ごと、工程ごとに丁寧に作る必要がある。

A, Bを組み合わせた具体的な
ツールの作成や構造化、環境調
整などの支援計画の立案
支援の方向性は基本に忠実に
具体策やツールは個別化する

支援の結果等のフィードバック

③支援

・障害特性の理解 ・支援の手順書に基づく支援 ・日々の記録等

強度行動障害支援者養成研修(基礎研修)

基礎研修が目指すもの

- ① 「支援の手順書」に書かれている内容とその根拠を理解する
- ② 詳細な手続きまで手順通りにルールを守る
- ③ 支援内容の概要や利用者の行動を記録し報告する

実践研修が目指すもの

- ① サービス管理責任者が作成した個別支援計画を読み込み、「支援手順書」を作成する
- ② 「支援手順書」のサービス提供方法について正確に伝達し、日々の支援結果の記録方法についても的確に指示する
- ③ 一定期間の手順で実施した支援の結果を取りまとめ、サービス管理責任者と相談し、支援方法の変更や継続について議論する

和歌山県強度行動障害支援施設職員養成研修（連続研修）について

<目的>

行動障害を有する方を支援する施設等を対象に、講義、事例による実践研修を行うことを通じて、施設内での行動障害を有する方への虐待及び不適切な支援の防止並びに行動障害の軽減を図る方法の検討等を行い、もって、行動障害を有する方を支援する職員を養成することを目的とする

<受講対象>

- 和歌山県内で行動障害を有する方を支援する施設等で、2名程度
- 受講者のうち、少なくとも1名は強度行動障害支援者養成研修の基礎研修及び実践研修を受講済であることもう1名についても基礎研修は受講済であること

<研修内容> *より実践向きの研修

- 行動障害を有する方を自施設で支援する中で、実際に困っている事例について、検討を行う
- 研修の中で、実際に支援計画を立て、現場に持ち帰って実践。その成果を記録に取り、次の研修会でさらに検討を重ねる
- 支援計画の立案や行動記録に役立つ考え方やツールを紹介（ABC分析、ストラテジーシート、「行動・状況」分析シート、スキャターシートなど）

<研修日程>



<現場での支援の実施>

①	【講義】強度行動障害の理解 — 支援の基本的考え方 — 強度行動障害の状態 — 行動障害が起きる理由	9
---	---	---

強度行動障害の理解

- ・ 支援の基本的考え方
- ・ 強度行動障害の状態
- ・ 行動障害が起きる理由

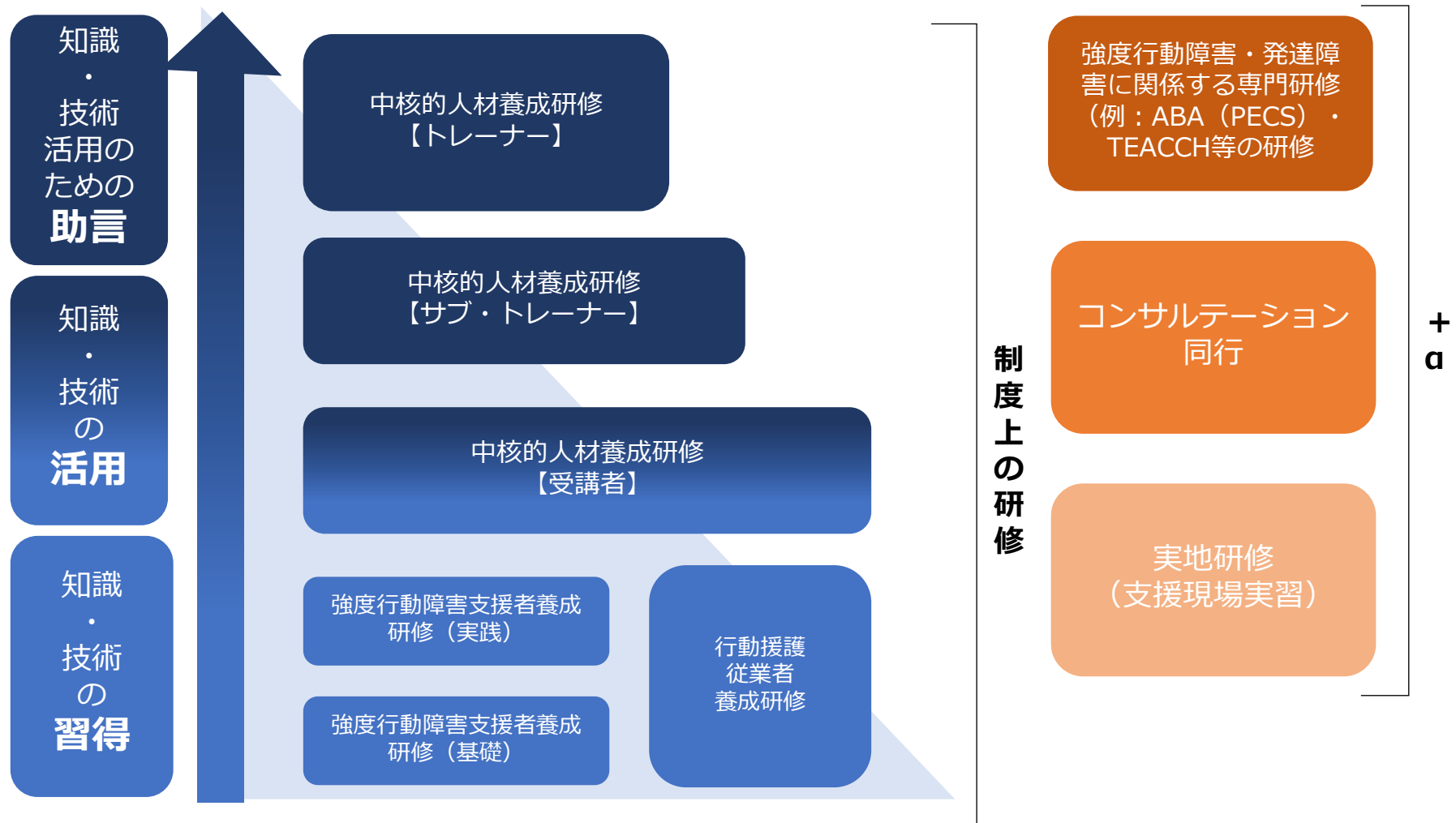
本題に入る前に・・・

- 強度行動障害支援者養成研修（以下、強行研修）
の位置づけ
- この時間で学ぶこと

強行研修のストーリー & 到達点

ストーリー	基礎研修	実践研修
①	強度行動障害について基本的なことを知る	支援を組み立てるための基本的な流れの確認
②	アセスメントに基づいた（情報を収集し、解決すべき課題を整理した上での）個別支援の大切さを理解する	アセスメントの具体的な方法を学ぶ
③	支援の具体的な方法を知る	支援手順書の作成方法を学ぶ
④	チームプレイの重要性を理解する	記録の方法と支援手順書の修正方法を学ぶ
⑤	適切な支援を続けていくための知識を得る	組織として取り組むことの重要性を学ぶ
到達点	計画された支援の根拠を理解し、決められた手順通りに支援をすることができる。	チームの動きをイメージし、支援の手順を考え文章化する。また、支援結果に合わせ、支援及び手順の修正をすることができる。

強度行動障害の状態にある人への支援スキル修得に関する強行研修の位置づけ



この時間で学ぶこと

- 強度行動障害の状態になぜなるのかを学びます。
そして、**予防**の重要性、**軽減**方法を学びます。
- 強度行動障害が軽減されることが最終目標ではなく、
強度行動障害という状態になっている人、
強度行動障害という状態になりやすい人が、
地域のなかで安心して幸せに生活すること
だということを確認します。

この時間の流れ

講義

 動画視聴

- ① 支援の基本
- ② 強度行動障害とは
- ③ なぜ強度行動障害という状態になるのか
- ④ 児童期の予防の大切さ
- ⑤ まとめ：強度行動障害と社会参加

①支援の基本

支援とは

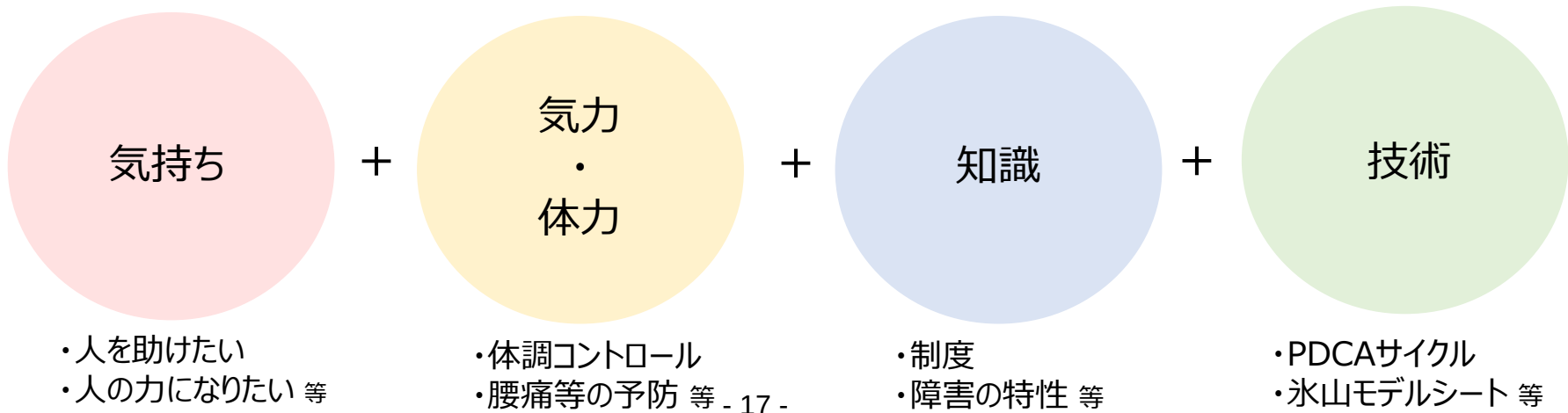
他人を支えたすけること

労力や金銭などの面で、その活動や事業を助ける意を表す



出典：三省堂大辞林第三版

支援の専門家が、支援を提供する際に必要なもの



基礎的な支援の流れ



よりよい支援の流れをつくるためのポイント



2 情報整理時、**ICF**を活用する



2 情報分析時、**氷山モデルシート**を活用する



チームで支援の手順を統一するために、
支援手順書を作成・共有する



11項目におよぶ支援の流れは、大きく下記の4つに分けることができる。

- 1～6 = 計画 (Plan)
- 7・8 = 実践 (Do)
- 9・10 = 評価 (Check)
- 11 = 改善 (Action)

⇒これを「**PDCAサイクル**」といいます

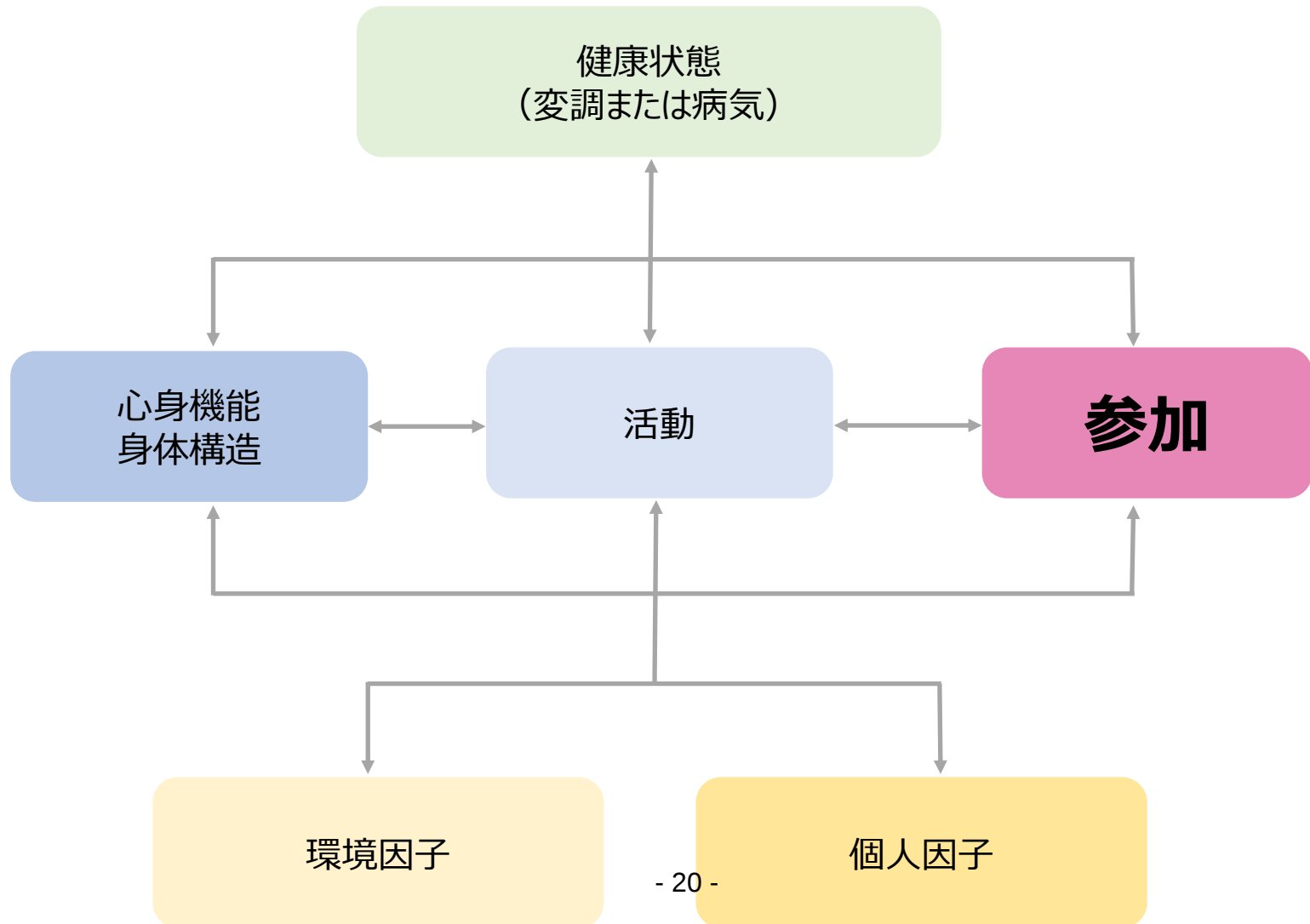
業務を継続的に改善していく手法。品質管理の国際基準であるISO9001や、ISO14001などにも考え方が採用されている。



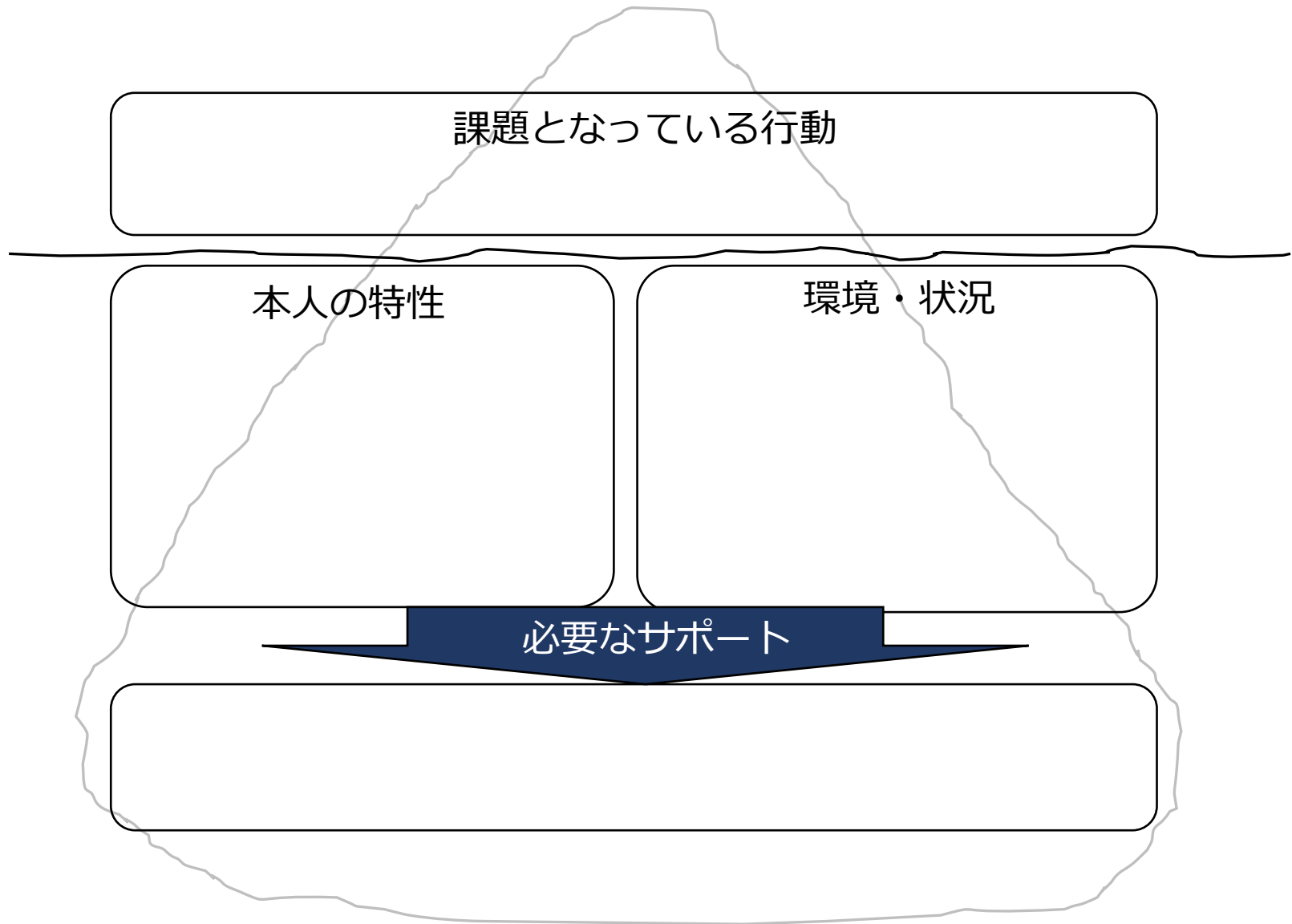
よりよい人生¹⁹へ向かう

ICF（国際生活機能分類）とは

- ▶ International Classification of Functioning, Disability and Health 2001年5月 WHO総会で採択
- ▶ ■人間全体を見る ■個別性をとらえる ■サービスの効果を全体的にとらえる ものとして使われている



これが「冰山モデルシート」です



これが「支援手順書（例）」です

支援手順書/記録用紙

日付け	20〇〇年〇月×日	氏名	Tさん	記入者	支援員B
工程	本人の動き	支援者の動き・留意点		本人の様子(記録)	
事前準備		スケジュールに活動カードをセット。 お茶をカバンに入れる。			
スケジュール確認	出発前に支援者と一緒にスケジュール確認	Tさんに見えるようにスケジュールを示し、活動カードを1つ1つ指差しして予定を最後まで確認する。 最後まで確認できたらカバンを渡して出発するように促す。			
散歩	公園に向かって歩く	Tさんの横を歩き、通行人や車をぶつからない様に注意する。 ぶつかりそうな時はTさんの前に出てジェスチャーで止まる様に促す。 公園に近づくとき走り出すことがあるので、横断歩道の前で本人の前に出て身体の前には手を出すジェスチャーで止まる様に促し、支援者が安全確認する。			
公園	公園の入り口でスケジュール確認 ブランコで遊ぶ お茶を飲む	公園の入り口でスケジュール確認(活動カードを外す)。 ブランコに移動、本人が満足するまで遊んでもらう。 満足して動き出したら、次のスケジュールを示しベンチに移動。 ベンチでスケジュール確認(活動カードを外す)、お茶を飲む。 終わったら次の活動を伝える。 *Tさんが水遊びを始めた時は、タイマーを3分にセットし、Tさんに見える様にセットし、「3分でおしまい」と声かけ。 タイマーがなったらTさんが水道を止めるので、次の活動を促す。			
外食	飲食店に行き食事をする	お店の前で走り出すことがあるので、本人の前に出てジェスチャーで止まってもらい支援者が安全確認。 店の前でスケジュール確認(活動カードを外す)。 メニュー表を見せると、食べたいものを指差すので、支援者が注文、購入する。 食事は見守りする。 食べ終わったら次の予定を伝える。			
帰宅	自宅に戻る	スケジュール確認(活動カードを外す)。 家族にTさんの様子を伝える。			

*スケジュール確認の手順

- ・スケジュールカードを指差し、次の活動を単語で伝える
- ・活動場所に着くとカードを外しポケットに入れる
- ・次の活動を伝える際はスケジュールカードを指差し、単語で伝える

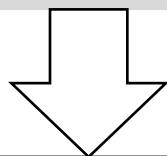
*本人と関わる際の留意点

- ・声かけは最小限にする(声かけが多くなると混乱しやすいため)
- ・公園やお店の近くでは目的に向かって急に走り出す(22分)
- ・事前にジェスチャーで止まる様に促し支援者が安全確認する

②強度行動障害とは

「強度行動障害」とは

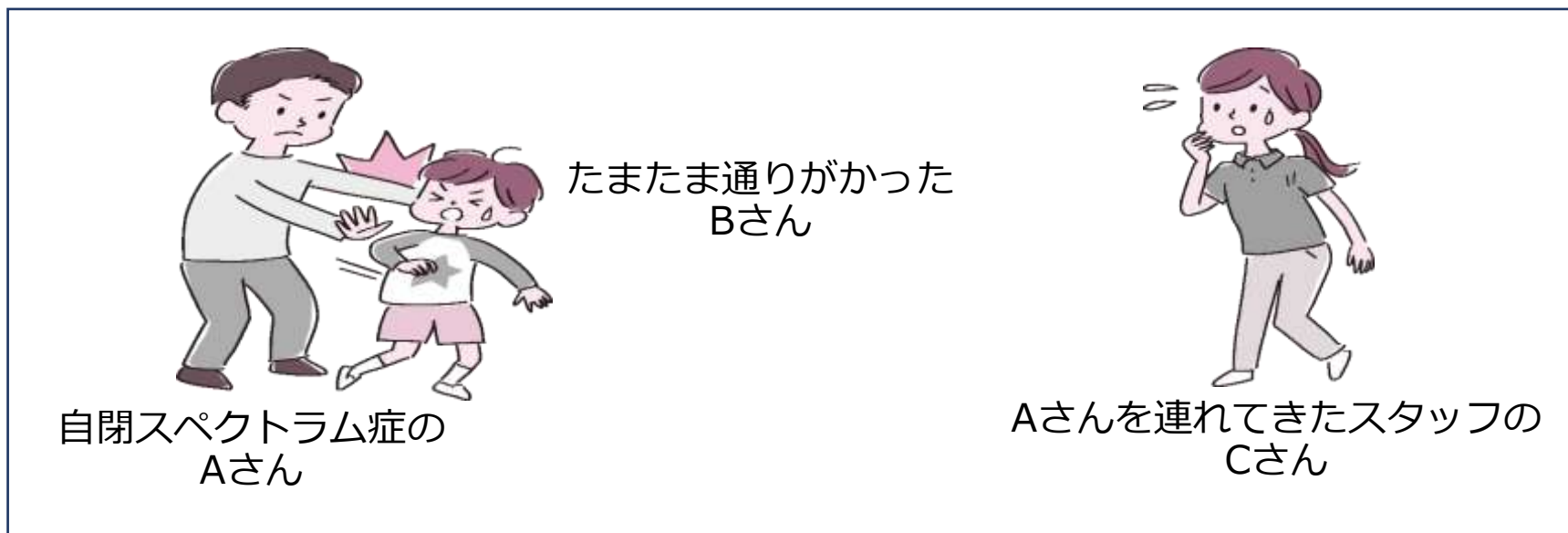
自傷、他傷、こだわり、ものの壊し、睡眠の乱れ、異食、多動など本人や周囲の人のくらしに影響を及ぼす行動が、著しく高い頻度で起こるため、特別に配慮された支援が必要になっている状態を意味する用語



- × もともとの障害
- その人の状態のこと

③なぜ強度行動障害という状態になるのか

- ・あるショッピングモールでの出来事です。
- ・放課後等デイサービスの活動の一環で、数人の子どもたちと一緒に買い物体験に来ていたAさん。
- ・あるショッピングモールで、たまたま通りかかったBさんを押してしまいました。
- ・困っているのは誰でしょう？



一般的には、「わけのわからないまま押されてしまったBさん」
「Aさんを連れてきたCさん」

実は、Aさんも困っています。

なぜなら、ショッピングモールのようなうるさい環境が苦手なほか、
そういった環境にいつまでいなければいけないのか分からないからです。

「うるさくていやだよ～」

「いつまでここにいなければいけないの？」

「はやく帰りたいよ～」

障害により、こういった気持ちを言葉で
上手に伝えることができない

その困り具合を・・・

“目の前に通った子を押す”という行動で表現



だから答えは、「みんな」です

ということを、この研修の受講者には理解して欲しいのです。

Aさんのように、障害からくる苦手さを持つ人たちは、困っています。

障害からくる苦手さ

先の予測をすることが難しい

見えないものの理解が難しい

話し言葉の理解が難しい

抽象的であいまいな表現の理解が難しい

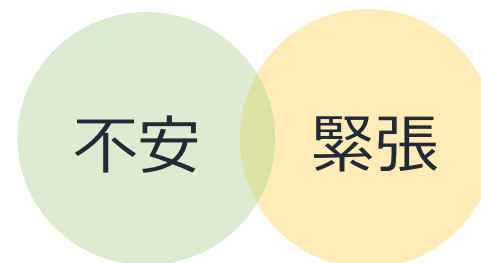
話し言葉で伝えることが難しい

やりとりの量が多いと処理が難しい

少しの違いで大きな不安を感じる

聴覚の過敏や鈍麻がある

⋮



不安や緊張から

逃れたい

不安や緊張を

伝えたい

不安や緊張に

気づいてほしい

でも方法がわからない



気持ちを **行動** で表す



- そのまま、障害からくる苦手さが解消されないと、さらに、激しい行動をとることがあります。



- また、適切な行動を教えてもらう機会がなかったり
- 自分の気持ちを伝えるために激しい行動を取った時、周囲がその行動を止めるために本人が望むままの対応を繰り返していると、「激しい行動をすることで自分の気持ちが伝わる」と理解し、激しい行動が定着してしまうこともあります。

このように、

- ☑ 適切な行動を教えられていない
- ☑ 周囲が誤った対応を繰り返す

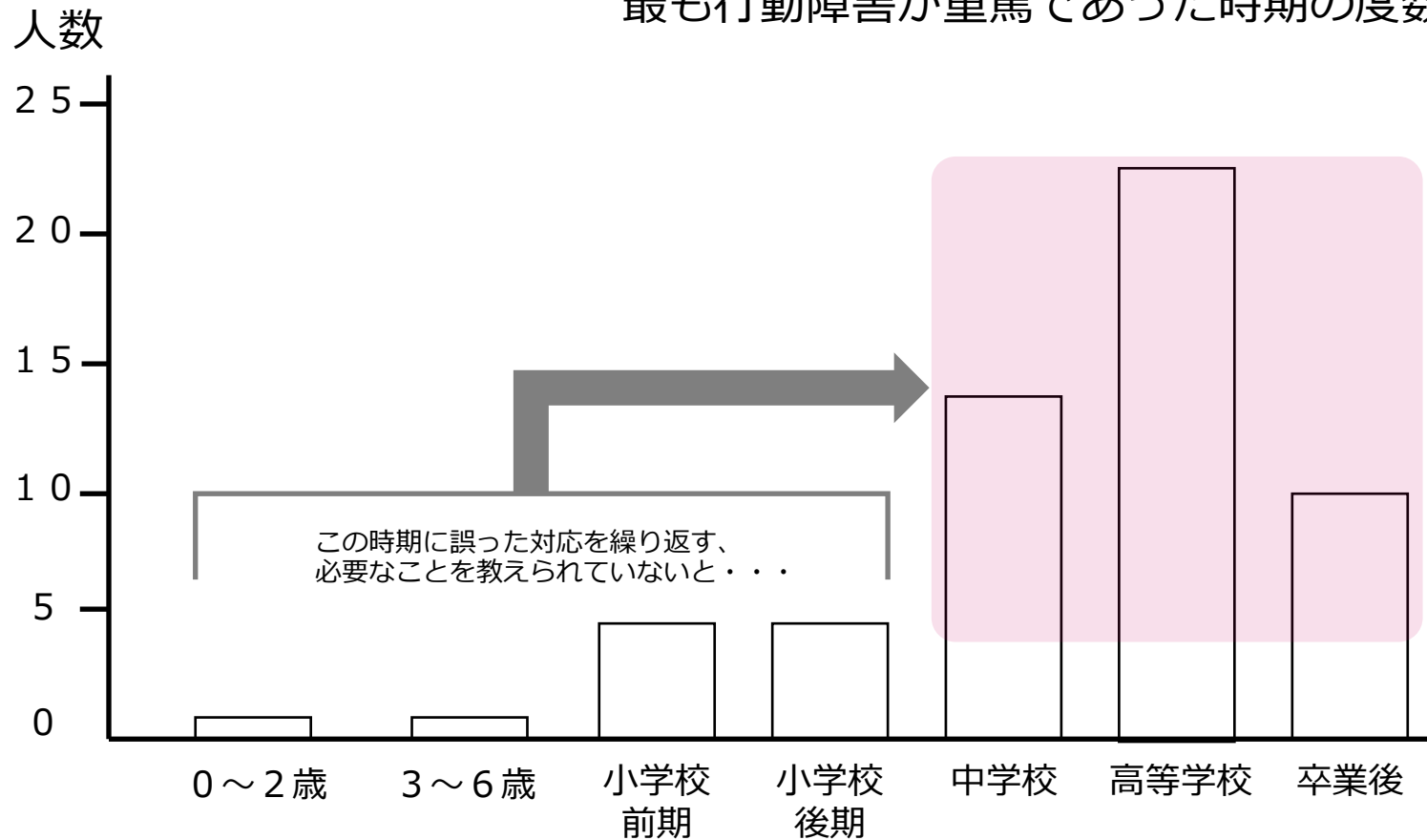


行動が激しくなっていく

= 「強度行動障害の状態」

④児童期の予防の大切さ

最も行動障害が重篤であった時期の度数分布



厚生労働省平成24年度障害者総合福祉推進事業「強度行動障害の評価基準等に関する調査について」報告書
社会福祉法人全日本手をつなぐ育成会

だから、幼児期・児童期の適切な関わり（例えば、本人に合った学び方でコミュニケーション方法を身につけることなど）が重要

⑤まとめ：強度行動障害と社会参加

—誰もが幸せに生きていくことができる社会に—

▶適切な支援がない場合

先ほどのAさんの事例で考えてみましょう



知的障害を伴う自閉スペクトラム症のAさん

「うるさいのが苦手」「いつまでいるのかわからない」

苦手な環境が続く（言葉で上手く伝えられない）。



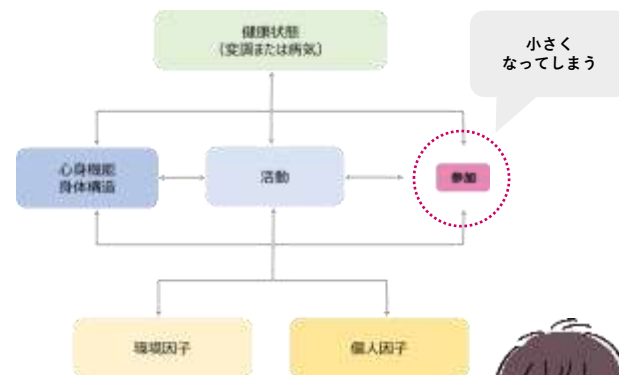
（自分の気持ちを表すために）近くを通った子を押す。



ショッピングモール 立ち入りを断られる

買い物ができない

生活の範囲が狭まる



事業所から利用を断られることも・・・33。そして、より行き場のない生活へ



▶適切な支援がある場合

知的障害を伴う自閉スペクトラム症のAさん

本人の特性に合わせ、騒がしくない時間帯にお店に行く
いつまでお店にいるか本人にわかるように伝える。

「合理的配慮」といいます

「分かる」「快適」

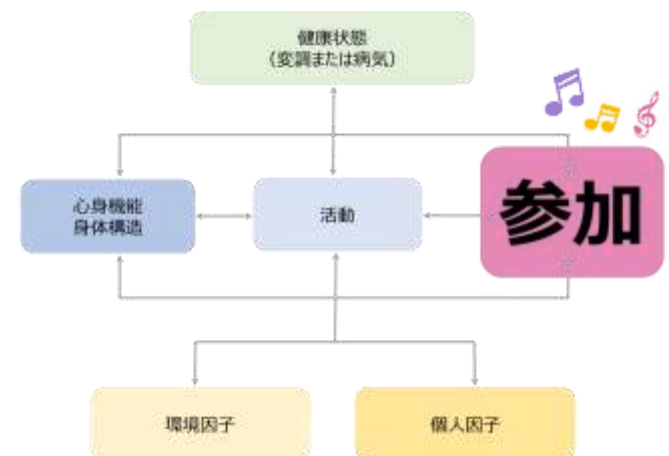
「充実」「安心」



・外出を楽しむ ・違うお店でも買い物ができる

社会参加が進む

地域の中で安心して幸せな生活ができる



強度行動障害の状態になっている人は、
「**困った人（子）**」ではなく「**困っている人（子）**」
＝合理的配慮が必要な人

私たち支援者は、
私たちの理解や配慮によって

- ☑ 強度行動障害の状態にならないよう**予防**することができる
- ☑ 既に現れている強度行動障害の状態を**軽減**できる

そして

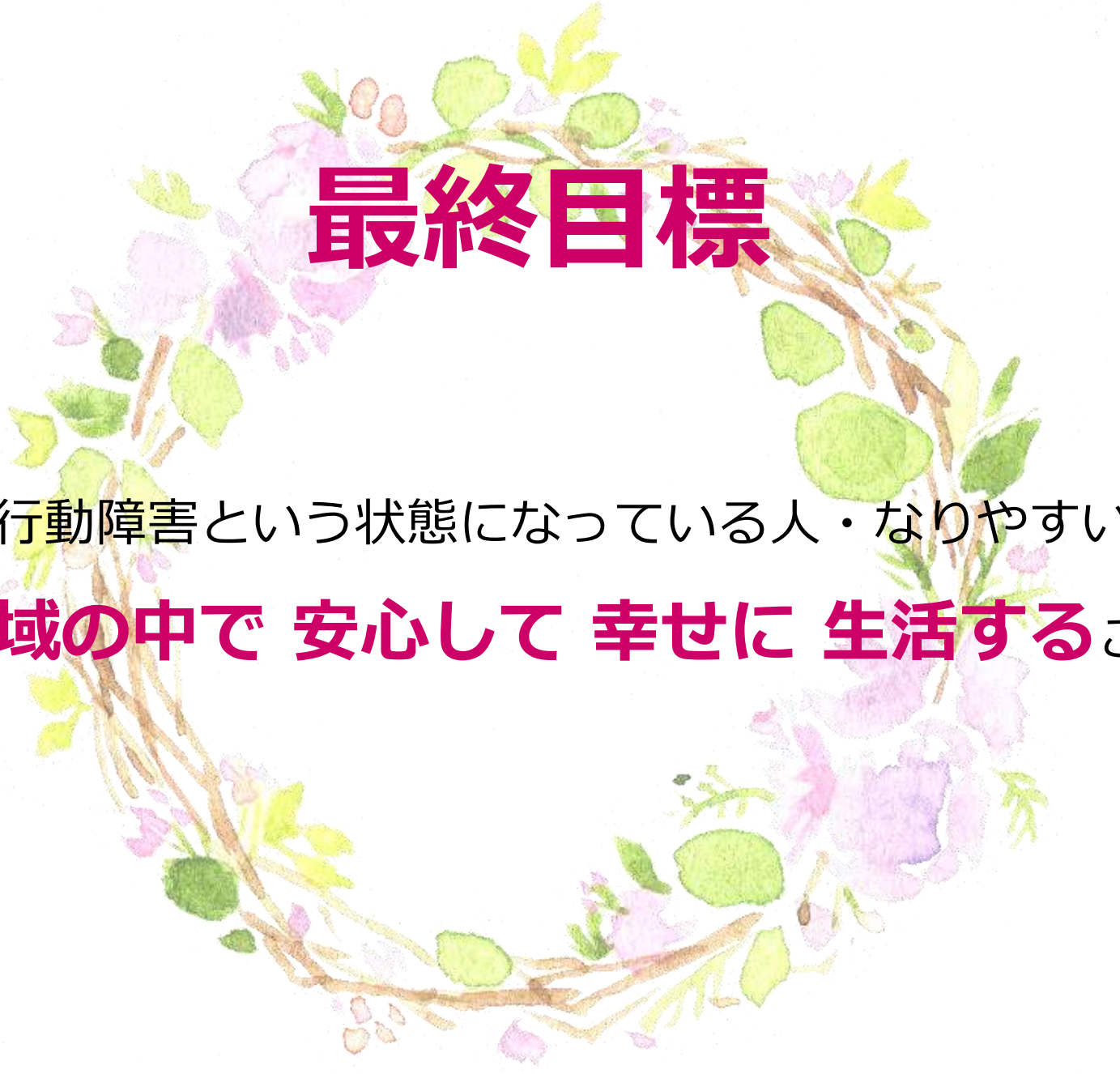
- ☑ 彼らの**社会参加**を進めることができる

ということを認識することが大切



動画を視聴します

過去に、強度行動障害の状態になったことのある鈴木さん（仮名）のお話



最終目標

強度行動障害という状態になっている人・なりやすい人が
地域の中で 安心して 幸せに 生活すること

②	【講義】強度行動障害の理解 —障害特性の理解
---	---------------------------

38

強度行動障害の理解

- ・ 障 害 特 性 の 理 解

和歌山県発達障害者支援センターポラリス
松井 景子

この時間で学ぶこと

- 関わる側の特性理解の不足による「環境面が整っていない状況」が、強度行動障害のリスクを高める要因となることがあります。
- 知的障害の程度が中度～最重度であり、自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害（以下、自閉症と記す）の特徴が強い人たちが、強度行動障害の状態になりやすいという現状があります。したがって、自閉症の方々の特性を理解しておくことが重要です。

この時間の流れ

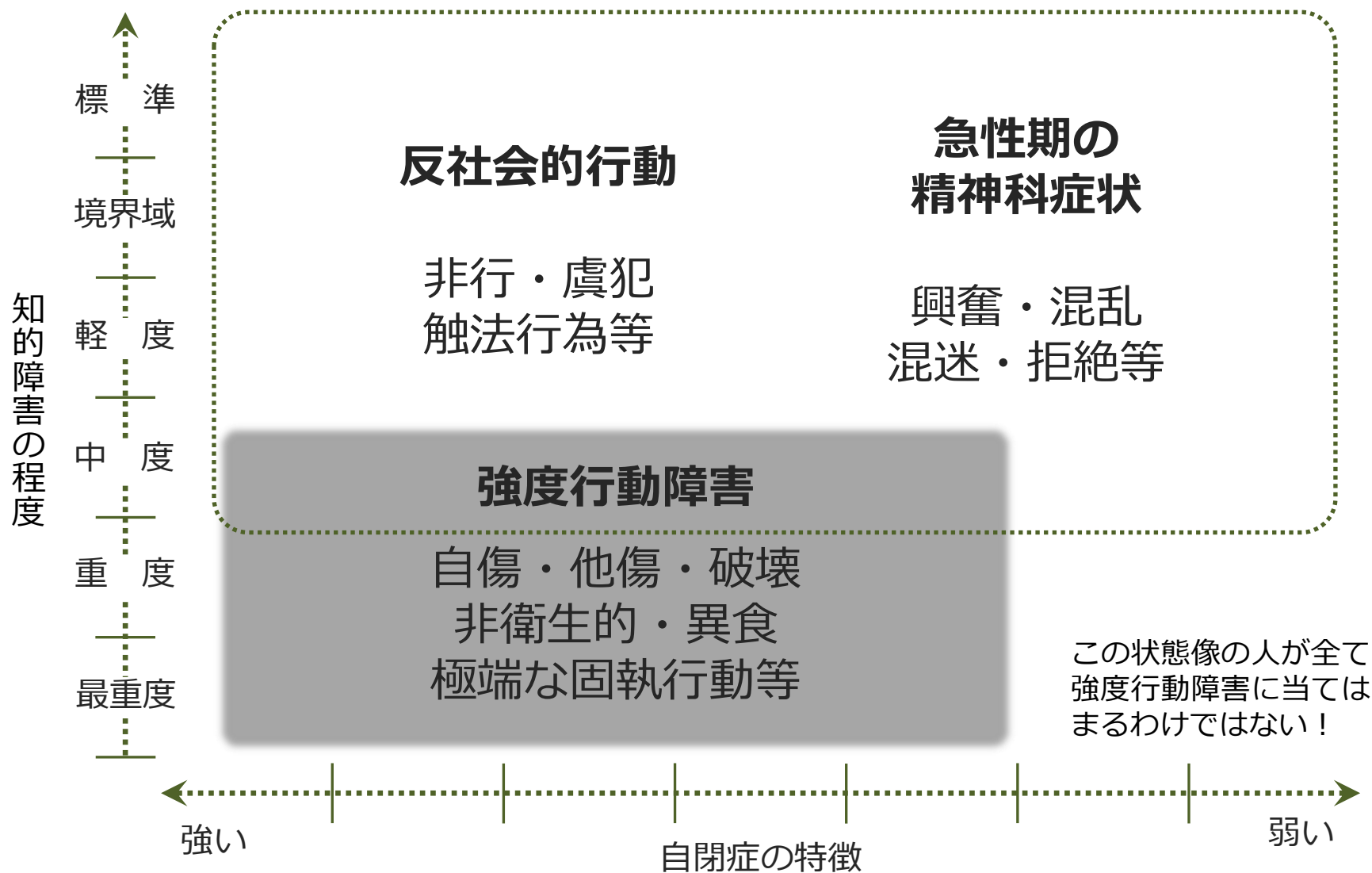
講義

 動画視聴

- ①なぜ自閉症の特性を学ぶのか
- ②自閉症について
- ③自閉症の特性を整理する
- ④学びと肯定的理解の重要性
- ⑤知的障害および精神障害について

①なぜ自閉症の特性を学ぶのか

強度行動障害になりやすいのは



強度行動障害と自閉症の関連性が高い
とされています。

したがって、
強度行動障害への支援を学ぶためには、
まず自閉症のことを知ることが大切です。

強度行動障害に関する調査結果①

岡山県が実施した2019 年度 強度行動障害に関する
実態調査報告書より

- 療育手帳所持者の2 %が強度行動障害
→ちなみに、強度行動障害リーフレット
(平成25 年度厚生労働省)によれば、推計値
として、強度行動障害得点10点以上の人が療育
手帳所持者の概ね1 %程度(全国で約8000人)
あるとしている。

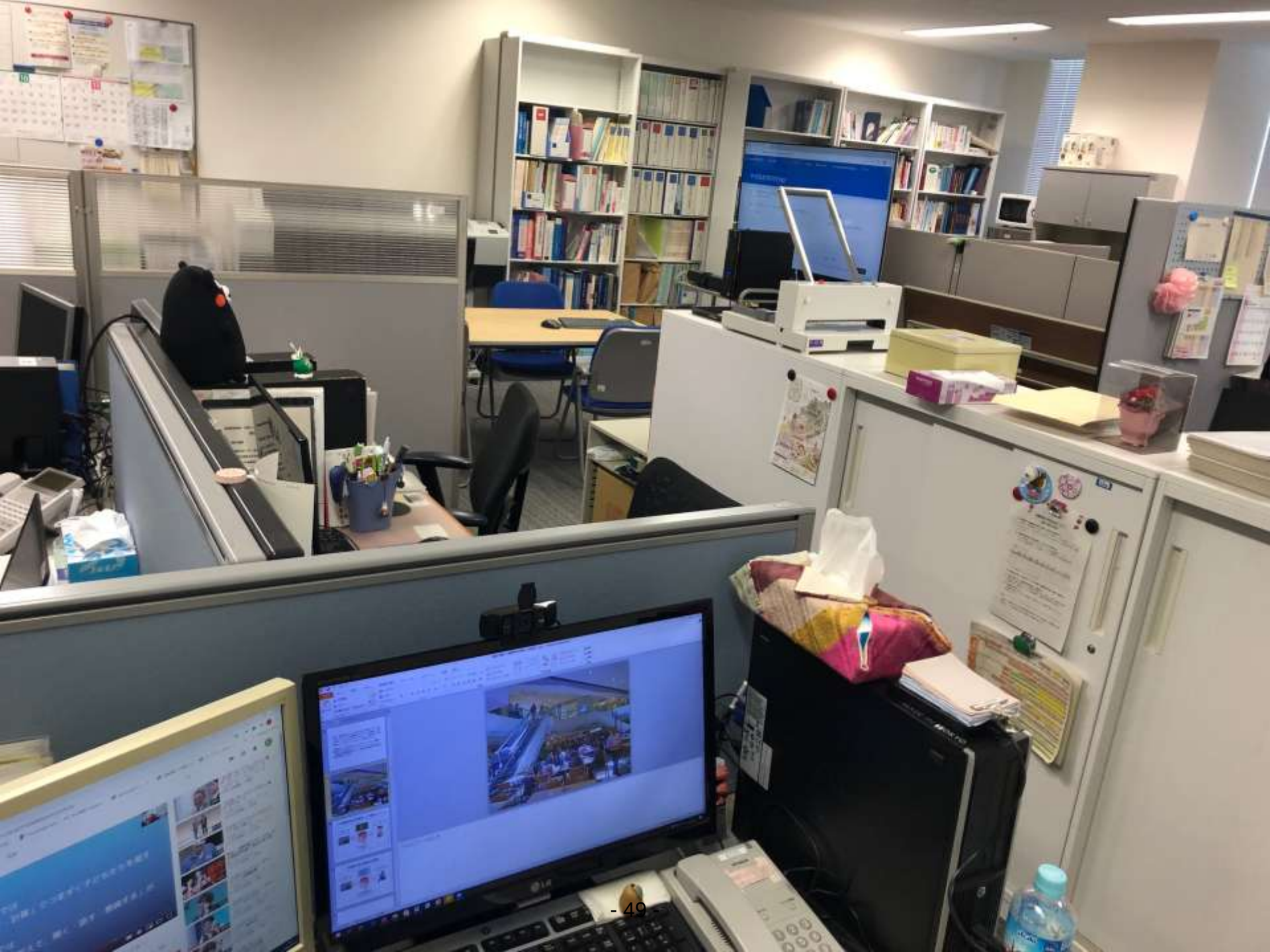
強度行動障害に関する調査結果②

岡山県が実施した2019 年度 強度行動障害に関する 実態調査報告書より

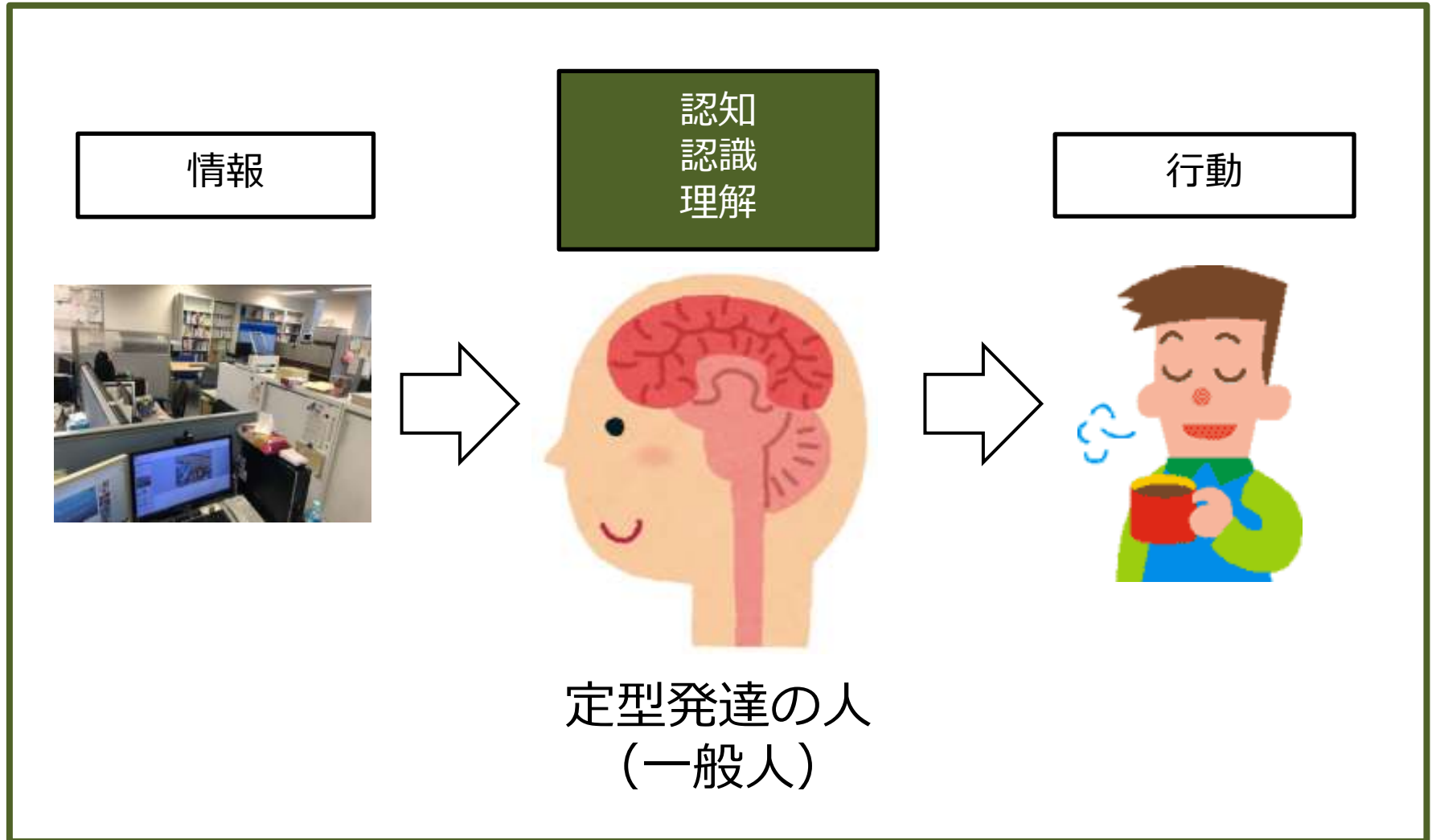
- 知的障害あり（96.6%）、自閉症あり（52.6%）
- 知的障害と自閉症を併せ持つ人は50.8%
 - 強度行動障害リーフレット（平成25年度厚生労働省）には「強度行動障害になりやすいのは、重度・最重度の知的障害があったり、自閉症の特徴が強い『コミュニケーションが苦手な人』です」という記載がある。
- 強度行動障害がある人を支援している機関は、
障害者支援施設：77.1%、生活介護事業所：50.0%
就労継続支援 B 型事業所：4.2%、
支援学校：33.3%、精神科医療機関：44.4%

②自閉症について

- 現在、自閉症のことを正式には「自閉スペクトラム症」もしくは「自閉症スペクトラム障害」と呼びます。いろいろなタイプがいて、境目のない連続体として広がっているという考え方です。
- 自閉症は、社会性やコミュニケーションの困難、想像力（目の前にないことをイメージすること）の困難が診断基準となり、感覚の特異性も診断の際に考慮されます。



人は情報を脳で処理をして行動をしている

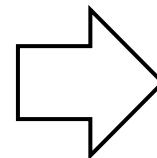
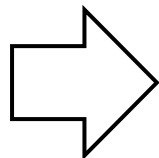


自閉症は脳の機能的な障害

情報



認知の違い
認識の違い
理解の違い



行動の違い



非定型発達の人
(発達に特性のある人)

③自閉症の特性を整理する

なぜ、自閉症の特性を整理するのか

自閉症の人たちは社会では少数派です。

その物事のとらえ方は、多くの人たちとは異なります。

自閉症の人たちがどのような物事のとらえ方をしているのかは、特性を把握し整理することで見えてきます。

特性とは

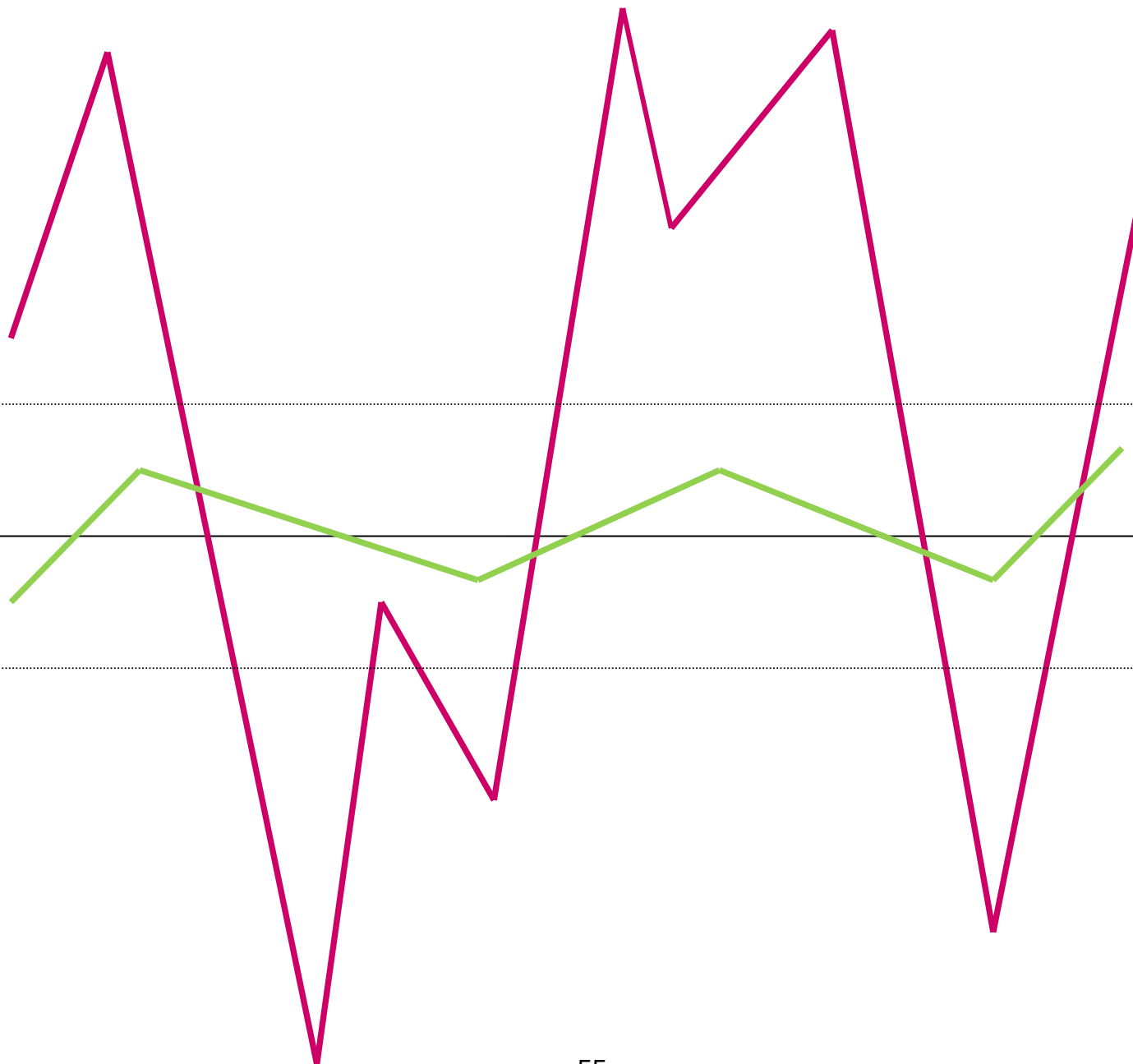
「強み」と「弱み」と言い換えることもできます。

「強み」は支援に生かすもので、
「弱み」は支援者が配慮するところ と言えます。

それゆえ、特性の把握においては、
「強み」と「弱み」の両面を整理しておくことが重要
です。

得意

苦手



- 自閉症の人たちの

物事のとらえ方に合わせた支援をすることで、
自閉症の人たちは適切に学ぶことができ、
強度行動障害という状況に陥ることなく、
よりよい生活を送ることができます。

- 私たちは、自閉症の人たちの特性を常に学び、
支援の基盤に置く必要があるのです。

ここでは、自閉症の特性を次のように整理しています。

- 社会性の特性
- コミュニケーションの特性
- 想像力の特性
- 感覚の特性

視点① 社会性の特性

【人や集団との関わりに難しさがある】

- ・ 相手への関心が薄い
- ・ 相手から期待されていることを理解することが難しい
- ・ 相手が見ているものを見て、相手の考えを察することが難しい

【状況の理解が難しい】

- ・ 周囲で起きていることへの関心が薄い
- ・ 周囲の様子から期待されていることを理解することが難しい
- ・ 見えないものの理解が難しい

☆ 自分がすべきことが明確であれば、集団への適応が増す。

視点② コミュニケーションの特性

【理解が難しい】

- ・ 話し言葉の理解が難しい
- ・ 一度にたくさんのかことを理解するのが難しい
- ・ 抽象的であまいな表現の理解が難しい

【発信が難しい】

- ・ 話し言葉で伝えることが難しい
- ・ どのようにして伝えたらいいか分からない
- ・ 誰に伝えていいか分からない

視点② コミュニケーションの特性

【やりとりが難しい】

- ・ 場面や状況に合わせたコミュニケーションが難しい
- ・ 表情や視線などの非言語コミュニケーションが難しい
- ・ やりとりの量が多いと処理が難しい

☆話し言葉だけではない、たとえば目に見えるツールを活用することで、伝達度が増す。

視点③ 想像力の特徴

※想像力：目の前にないことをイメージする力

【自分で予定を立てることが難しい】

- ・ 段取りを適切に組むことが難しい
- ・ なんとなく、だいたいなどのイメージを持ちにくい
- ・ 今やることを自分で判断することが難しい

【変化への対応が難しい】

- ・ 先の予測をすることが難しい
- ・ 臨機応変に判断することが難しい
- ・ 自分のやり方から抜け出すことが難しい

視点③ 想像力の特徴

【物の一部に対する強い興味】

- ・ 興味・関心が狭くて強い
- ・ 細部が気になり違いに敏感
- ・ 少しの違いで大きな不安を感じる

☆目の前に存在する視覚情報があるとわかりやすさが増す。

☆自分が興味・関心のある対象への思いが強みになることも多い。

視点④ 感覚の特性

【感覚が過敏または鈍感】

- ・聴覚の過敏や鈍麻がある
- ・視覚の過敏や鈍麻がある
- ・触覚の過敏や鈍麻がある
- ・嗅覚の過敏や鈍麻がある
- ・味覚の過敏や鈍麻がある
- ・前庭覚の特有の感覚がある

☆感覚に関する反応が、心身の状況や調子のバロメーターとなることも多い。



ここで動画を見ます

④学びと肯定的理解の重要性

- 「理解に始まって理解に終わる」のが支援なので、
わかったつもりにならないことが大切です。
- 基礎基本の学びをおろそかにせず、基礎基本に
いつも立ち返ることはとても重要です。

苦手なことには配慮し、得意なことは活かすのが支援の基本です。

繰り返しになりますが、得意なことを把握することはとても大切です（苦手とされていることも「ここまではできる」という見方もできるし、視点を変えれば「強み」になることもあるはずです）。

⑤知的障害および精神障害について

自閉症以外に、
強度行動障害に関連する障害として、
知的障害および精神障害があります。

知的障害の診断基準

(DSM-5では、知的能力障害もしくは知的発達症と表記される)

- 知的機能に制約があること

IQ70未満が知的障害の目安

※知的機能 = 言語理解力・論理的思考力・抽象的思考力・推理力・記憶力・
経験から学習する能力・概念形成能力・知的推理力等

- 適応機能に制約があること

日常の社会生活を営む上で必要とされる能力や行動に制約がある

- 発達期に生じたものであること

概ね18歳以前に知的機能の制約と適応機能の制約が始まる

※参考 -DSM-5（精神疾患の分類と診断の手引き）

軽 度 IQ 50-69

成人期においてその精神年齢は概ね9歳から12歳相当

中 度 IQ35-49

成人期においてその精神年齢は概ね6歳から9歳相当

重 度 IQ20-34

成人期においてその精神年齢は概ね3歳から6歳相当

最重度 IQ 20未満

成人期においてその精神年齢は概ね3歳未満

※軽度、中度、重度、最重度の区分はICD-10（国際疾病分類）による。

精神障害について

- 統合失調症、精神作用物質による急性中毒又はその依存症、知的障害、精神病質その他の精神疾患を有する者（精神保健及び精神障害者福祉に関する法律第五条）
- 精神障害があるため、継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける者（障害者基本法第二条）
- 幻聴、妄想、体感幻覚、感情の平板化、意欲低下、ひきこもりなどの具体症状が現れる。

③ 【演習】強度行動障害の理解
—困っていることの体験

73

強度行動障害の理解

・困っていることの体験

社会福祉法人 紀伊の郷日置川みどり園

藤川 和貴

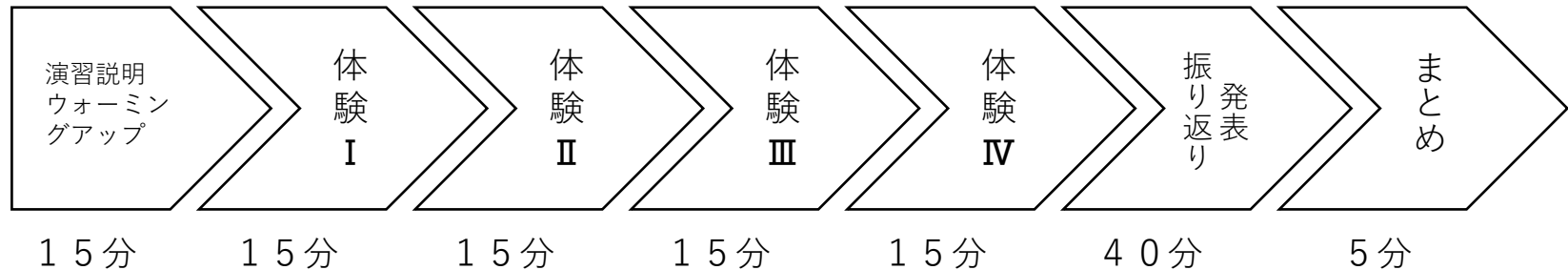
【この時間で学ぶこと】

- 強度行動障害は本人が強い困惑を感じ、その解決策が見出せないまま、なんとか抜け出そうともがいている状況と考えることもできます。
- この時間は、私たち支援者がどんな困惑を感じさせてしまっているのか、強度行動障害の状態にある方々の立場になって体験します。
- もちろん感じ方は人それぞれ違うと思いますが、自分たちの体験レベルよりもはるかに強い困惑を感じてこられた方々であるという思いを持ちながら研修を進めていければと思います。

演習（GW）について

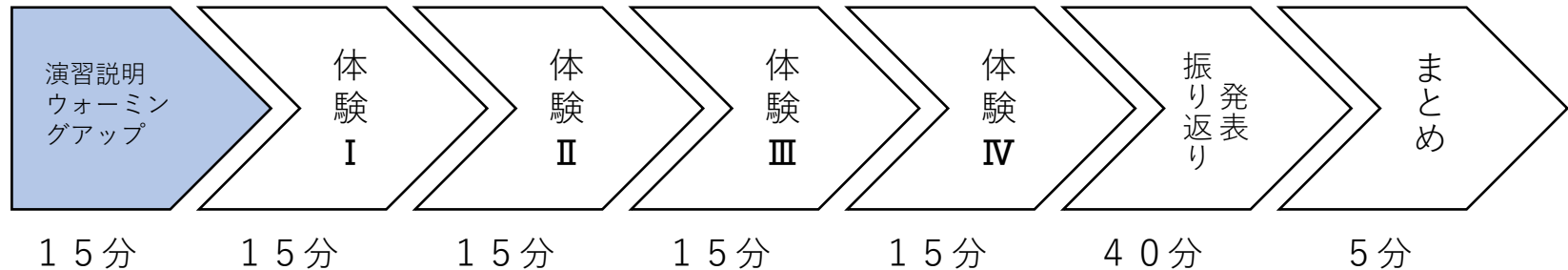
- この時間では受講者の皆さんに体験をしていただきます。
- 各グループに分かれて演習を行います。
- 体験を共有するために、それぞれの体験ごとに皆さんが感じたことをお聞きします。

演習の流れ



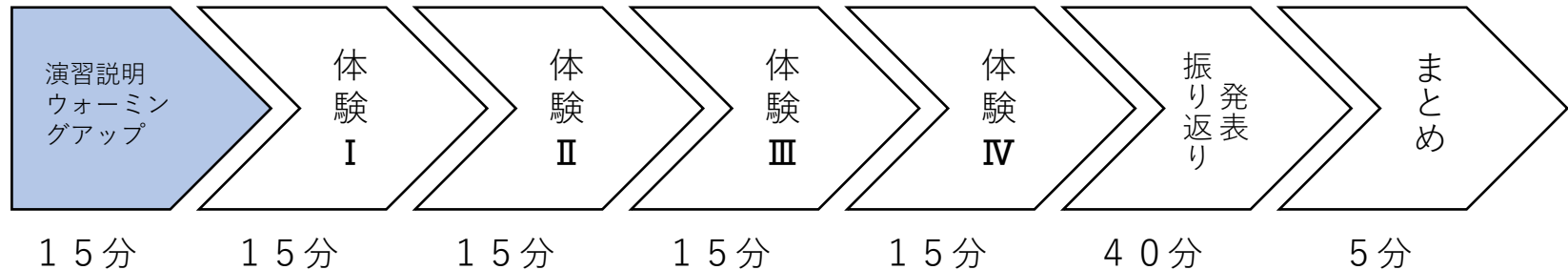
- 受講者同士の距離も縮まるようウォーミングアップとしてゲームをします。
- 体験メニューは4パートあります。
何を体験しようとしているのかを考えながら、積極的に参加しましょう。
- 途中で何を感じたか、数名に発表してもらう場面もあります。
- 最後にそれぞれで振り返りを行い発表します。

ウォーミングアップ①



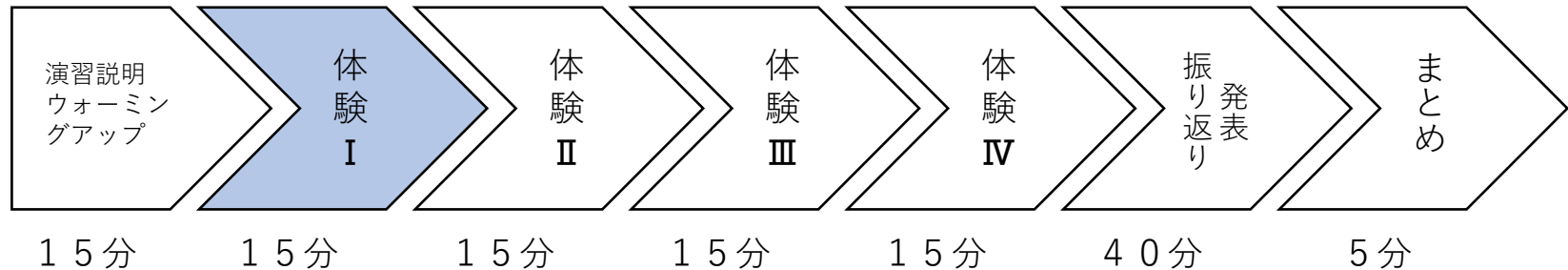
- 先ずはウォーミングアップとしていくつかのゲームをしましょう。
- 最初にするのは、ジャンケンゲームです。講師と皆さんが一齐にジャンケンをします。最後まで残るのは誰でしょうか。
- 全員立ち上がり、講師と一齐にジャンケンをして、勝った人とあいこ人は立ったまま、負けた人は座ってください。
- 最後に残った何名かの方に、自己紹介をしてもらいたいと思います。「お名前」「ご所属（事業所の所在地や県内のどの地域から参加されているのか）」「講師からのお題」を話していただきます。

ウォーミングアップ②



- ウォーミングアップ②では、講師との共通ゲームを行います。ウォーミングアップなので気軽に参加してください。
- これから講師が自身のことを伝えます。それに当てはまる人は立ったまま、当てはまらない人は座ってください。
- 今回も最後に残った何名かの方に、自己紹介をしてもらいます。その際に「ご所属（事業所）」「講師の地や県内のお題」を話してください。

体験Ⅰ 伝えられないもどかしさ

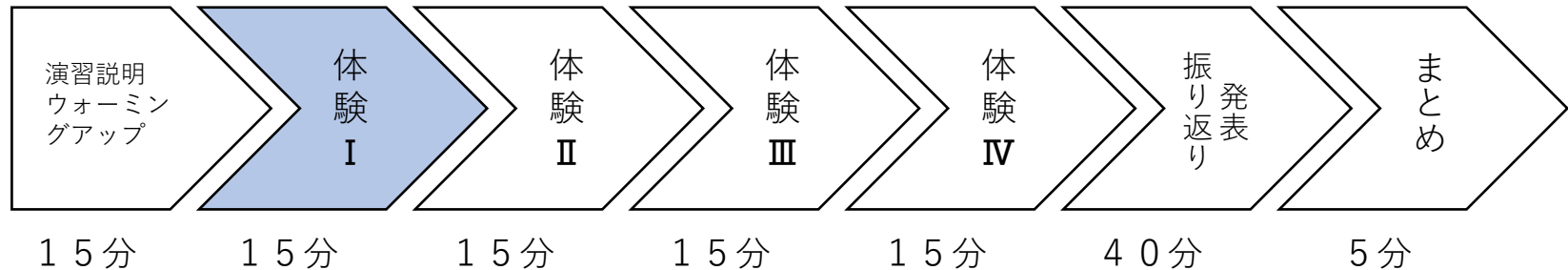


- 体験者は、講師からお題を顔の動き（表情）だけで他の受講者に伝えてください。
- 他の受講者の方々は、体験者が何を伝えたいのかを書いてください。

体験Ⅰ 伝えられないもどかしさ

- 体験者の伝えたかったこと

体験Ⅰ 伝えられないもどかしさ



- 体験者は、言葉を話す、唇を動かす、文字を書く、指文字は使えません。ジェスチャーのみで伝えてください。
- 他の受講者の方々は、体験者が何を伝えたいのかを書いてください。

体験Ⅰ 伝えられないもどかしさ

- 体験者の伝えたかったこと

①

②

体験Ⅰ 伝えられないもどかしさ

- 体験者の伝えたかったこと

①

②

体験Ⅰ 伝えられないもどかしさ

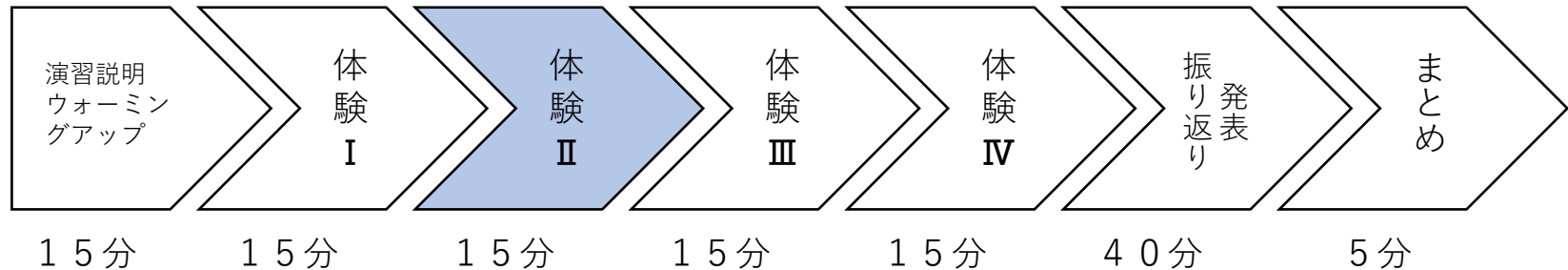
< 体験の共有 >

- この体験を通じて、強度行動障害の方々の困惑について皆さんは何を感じたでしょうか。
- 皆さんが自分なりに感じたことを体験者、その他受講者にもお聞きしてみましよう。

体験Ⅰ 伝えられないもどかしさ

- ここで体験してほしいこと
《特性確認シートをご確認ください》
- 『
【
○話し言葉で伝えることが難しい
○どのようなにつたえたらいいかわからない

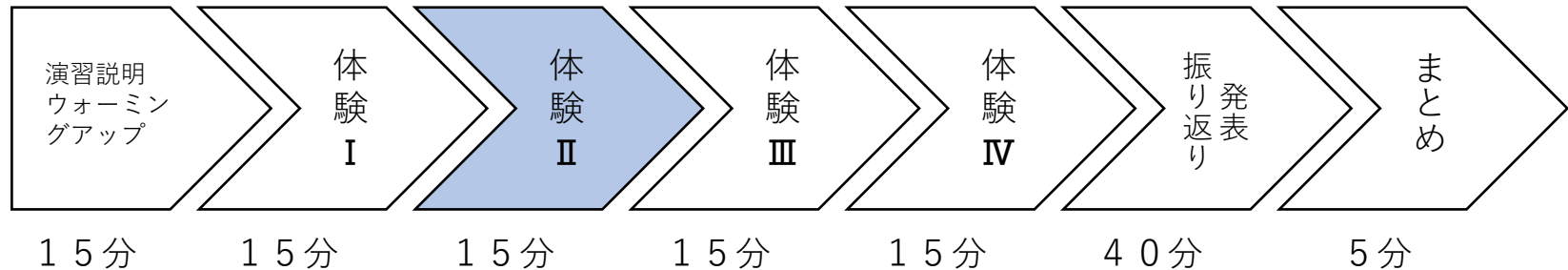
体験Ⅱ 意味のわからない苦痛①



- この体験での対象者はみなさん全員です。
- 講師が言葉だけでとある漢字の説明をします。みなさんはその言葉の情報だけでその漢字を再現してください。
- A4白紙にその漢字を書いてください。
- 講師の説明が終わったらなんという漢字だったか答えてもらいます。

漢字を書いてね

体験Ⅱ 意味のわからない苦痛②



- 今度は講師が言葉だけでとある図形の説明をします。

みなさんはその言葉の情報だけでその図形を再現してください。

- A4 白紙にその図形を描いてください。

図形を描いてね

体験Ⅱ 意味のわからない苦痛

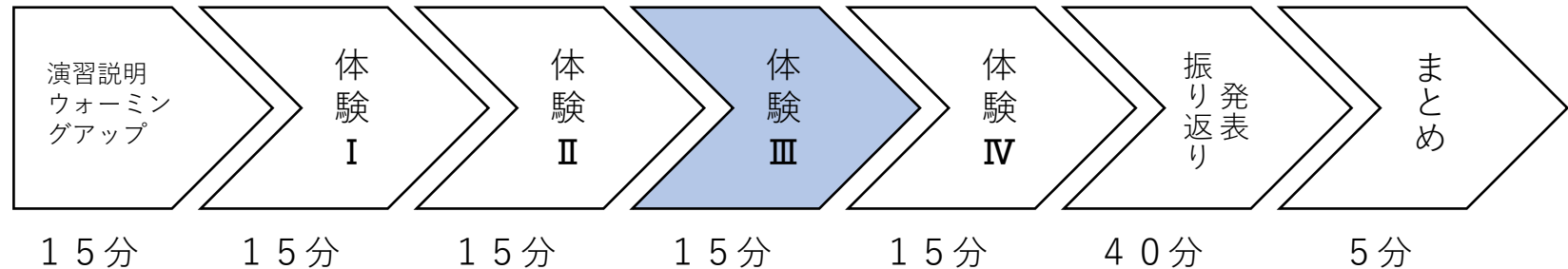
< 体験の共有 >

- この体験を通じて、強度行動障害の方々の困惑について皆さんは何を感じたでしょうか。
- 皆さんが自分なりに感じたことをお聞きます。

体験Ⅱ 意味のわからない苦痛

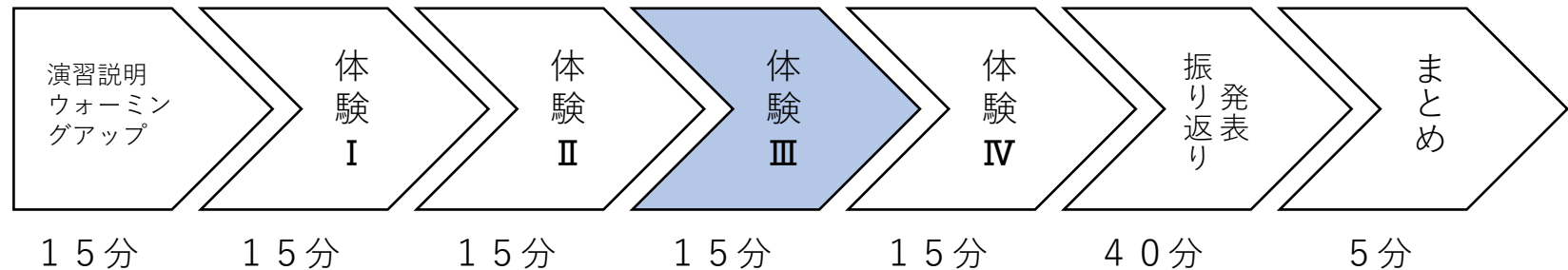
- ここで体験してほしいこと
《特性確認シートをご確認ください》
- 『
』
【
】
 - 話し言葉の理解が難しい
 - 抽象的で曖昧な表現の理解が難しい
- 『
』
【
】
 - 見えないものの理解が難しい

体験Ⅲ 見通しの持てない不安や恐怖



- この体験は2人1組で行います。
- これからお互いに見つめ合います。
- 講師からの合図でスタートします。

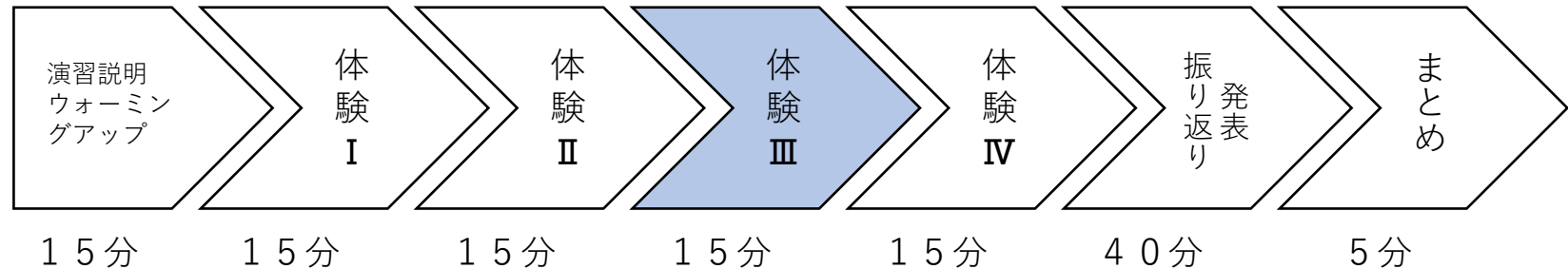
体験Ⅲ 見通しの持てない不安や恐怖



< 1回目 >

- 講師の合図で10秒間見つめ合います。
- 10秒間カウントします。
- 笑わないで頑張りましょう。

体験Ⅲ 見通しの持てない不安や恐怖



< 2回目 >

- 1回目と同じように講師の合図で開始します。
- 講師が終了を合図するまで続けてください。

体験Ⅲ 見通しの持てない不安や恐怖

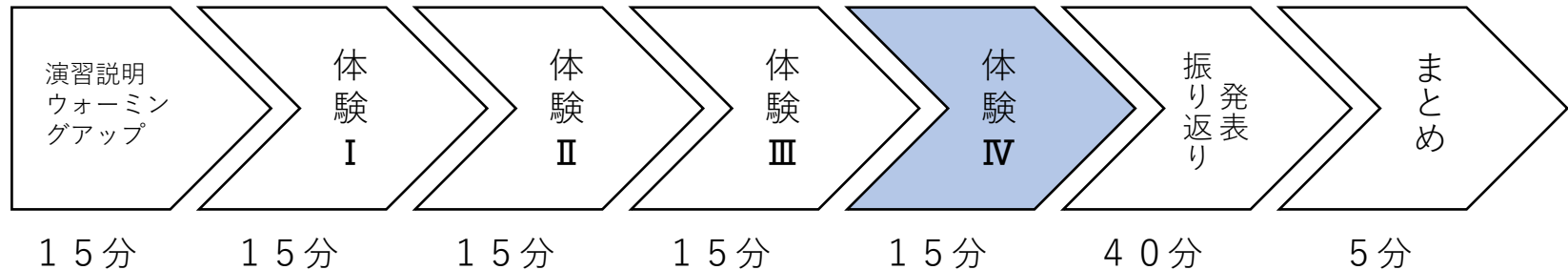
< 体験の共有 >

- この体験を通じて、強度行動障害の方々の困惑について皆さんは何を感じたでしょうか。
- 皆さんが自分なりに感じたことをお聞きしてみましょう。

体験Ⅲ 見通しの持てない不安や恐怖

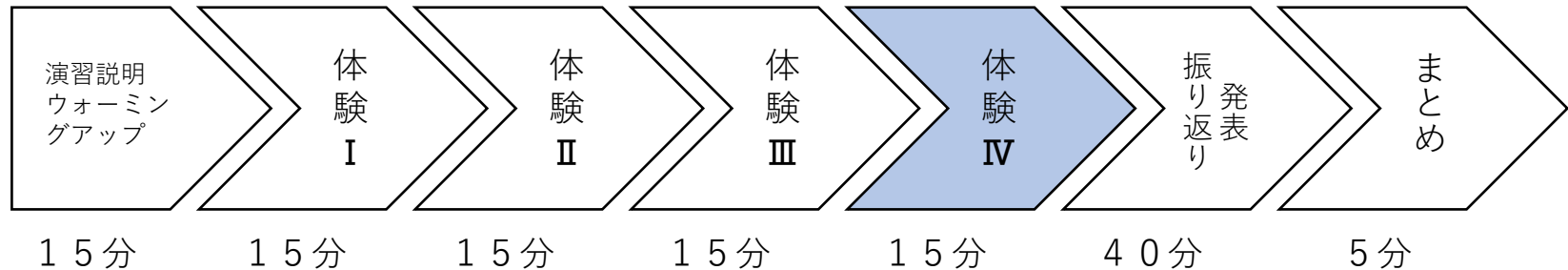
- ここで体験してほしいこと
《特性確認シートをご確認ください》
- 『
【
○段取りを適切に組むことが難しい
【
○先の予測をすることが難しい
○臨機応変に判断することが難しい

体験Ⅳ 感覚の特異性



- 各グループで1名体験者を選びます。
- グループの他の皆さんには、講師からお題を出しますので、それを思い浮かべてください。
- 講師の合図で一斉に思い浮かべたことを話してもらい体験者に聞き取ってもらいます。

体験Ⅳ 感覚の特異性



- 次は全員が体験者となります。
- これからある写真を皆さんに見ていただきます。
- それが何か考えてください。

体験Ⅳ 感覚の特異性

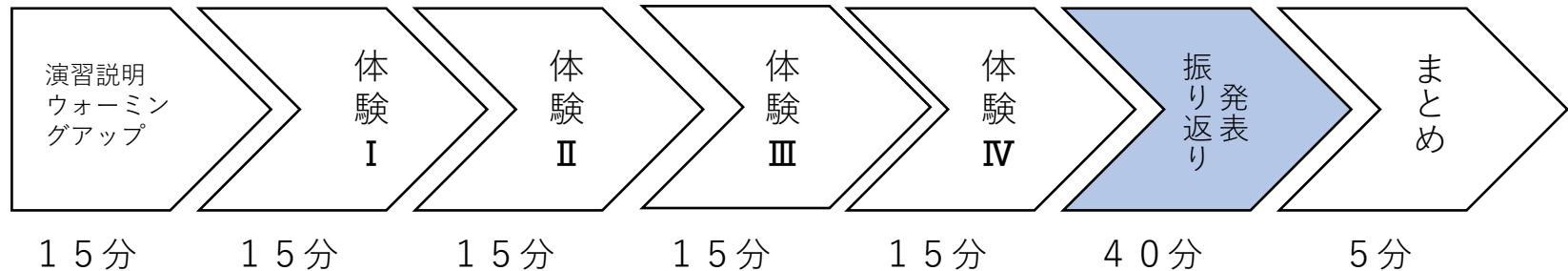
< 体験の共有 >

- この体験を通じて、強度行動障害の方々の困惑について皆さんは何を感じたでしょうか。
- 皆さんが自分なりに感じたことをお聞きしてみましよう。

体験Ⅳ 感覚の特異性

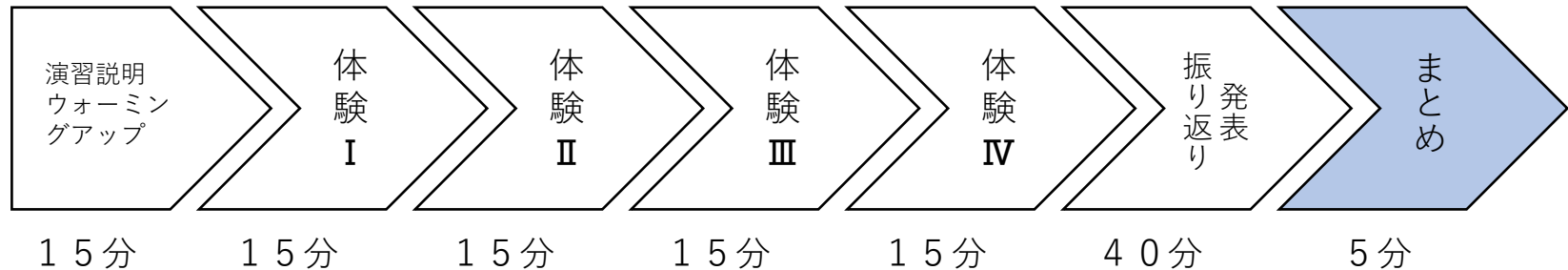
- ここで体験してほしかったこと
《特性確認シートをご確認ください》
- 『
』
【
】
○聴覚・視覚の過敏や鈍麻がある
- 『
』
【
】
○興味関心が狭くて強い
○細部が気になり違いに敏感

振り返り・発表



- 各グループで話し合いをします。
- 司会者・発表・記録者を決めます。
- この体験（強度行動障害の状態）から自分が感じた困難や、体験した以外のことで気付いた困難などを振り返り、発表してもらいます。

まとめ



- この体験を通じて、強度行動障害の状態にある方々がどのような困難を抱えているのか、私たち支援者がどんな困難を感じさせてしまっているかを改めて考えていただけたと思います。
- 受講者の方々が、それぞれに感じたことの違いはあると思います。しかし、強度行動障害の状態にある方々は、今日の体験よりももっと強い困難を感じておられる方々であるということを忘れず、日々の支援・対応に取り組んでいただきたいと思います。

④ 【講義】 支援のアイデア
—障害特性に基づいた支援

104

支援のアイデア

- ・ 障害特性に基づいた支援

社会福祉法人あおい会 太陽の丘
田中直樹

この時間で学ぶこと1

- 本人の特性に基づいた支援を整えることにより、強度行動障害の状態になることを予防する支援を行うことができます。
- この時間は、自閉症の特性をベースにした予防的な支援の在り方を理解することがテーマです。

この時間で学ぶこと2

- また、本人の状態像の変化に応じて支援をリニューアルしていかなないと、本人とのズレが生じてしまうこともあります。その場合は、改めて今までの支援を見直し、さらに支援の補整や補強を行っていきます。

この時間の流れ

講義

 動画視聴

- ① 支援の道筋
- ② 目で見てわかる支援が基本
- ③ 支援のポイントはどこにあるか
- ④ 具体的な支援のアイデアを動画で
- ⑤ 支援を見直すことの重要性

① 支援の道筋

- 支援においては次のような道筋を大切にします。

- I その人の特性や人生のニーズを把握する
- II その人の特性に配慮した支援を考える
- III その人の人生のニーズに沿った計画と実践、評価や改善のサイクル（PDCAサイクル）で、よりよい人生へと向かう

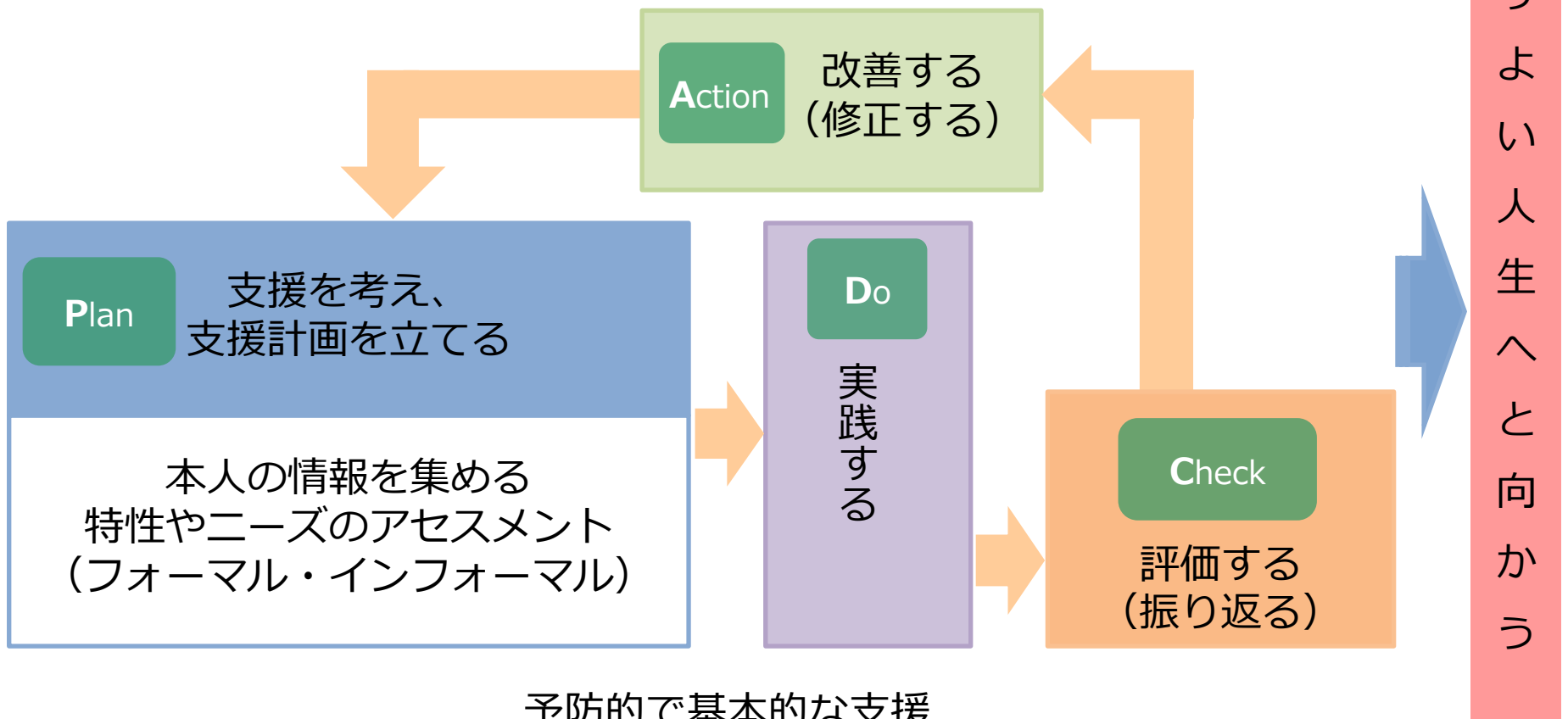
※PDCAサイクルとは、Plan（計画）・Do（実行）・Check（評価）・Action（改善）を繰り返すことによって、業務を継続的に改善していく手法のことです。支援を考える際もこのサイクルを重視します。

- IV 支援が停滞したり強度行動障害の様相が現れたりしたときには、改めて支援を見直し、支援の補整や補強をする

この講義では、II について主にお話しします。

予防的で基本的な支援をベースに、
プラスアルファの取り組みをするが、そこにもPDCAサイクルはある

強度行動障害の支援



② 目で見てわかる支援が基本

- 目で見てわかる支援をするのはなぜか？
 - 自閉症の人は目に見えないことの意味を理解したり思いを伝えたりすることに苦手さがあるから
 - 複数の情報を処理することに苦手さがあるから
 - 雑多な環境の中から必要な情報に目を向けることに苦手さがあるから

- 目で見てわかる支援をするために
 - わかりにくい情報や生きにくい環境で暮らしている人たち。一人一人にわかりやすい形で届けたり整理したりする必要がある
 - = その人に合わせた支援
 - = 合理的配慮

③ 支援のポイントはどこにあるか

確実に伝えたい6つの情報

- － 「いつ」
- － 「どこで」
- － 「何を」
- － 「どのくらい」
- － 「どうやって」
- － 「次は」

6つの情報を確実に伝えるための 5つの工夫

- 時間の工夫（生活の見通し）
- 場所の工夫（活動との対応・刺激の整理）
- 方法の工夫（やり方・終わり・次）
- 見え方の工夫（ヒント・着目）
- やりとりの工夫
（コミュニケーションツール）

時間の工夫（生活の見通し）

- どんな流れで生活するのかという理解を助ける。
- 言われるがまま（または好き放題）ではなく、自分で適切に情報をキャッチし行動できることを大事にする。

場所の工夫

(活動との対応・刺激の整理)

- この場所では何をするのかという理解を助ける。
 - － 整理整頓は基本中の基本
 - － エリア（境界）を明確に
 - － 場所と活動とが 1 対 1 対応できれば理想だが...
- 苦手な刺激を少なくするための配慮をする

方法の工夫（やり方・終わり・次）

- 「何を」「どのくらい」「どうやって」「次は」という理解を助けるために

－やることの内容や数や順序が違ってても進め方は同じという“システム”を提示する。

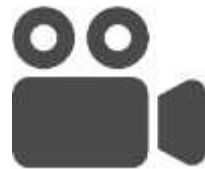
見え方の工夫（ヒント・着目）

- 見てすぐにわかる情報を提示するために
 - －必要な情報に注目しやすくする工夫
 - －見るだけで何をすれば良いかがわかる工夫
 - －情報や材料が見やすい・扱いやすい工夫

やりとりの工夫 (コミュニケーションツール)

- 伝え合いわかり合うコミュニケーションのために
 - －コミュニケーションの手続きを視覚的に示し、コミュニケーションの成功体験をサポート

④ 具体的な支援のアイデアを動画で



⑤ 支援を見直すことの重要性

- 自閉症の特性に基づいた予防的な支援を展開しても、うまくいかないことは当然出てきます。そんなときは、改めて今までの支援を見直し、支援の補整や補強をしていきます。
- この見直し作業を繰り返しながら、本人に合った支援を整え、本人が力を発揮しやすい環境をつくっていくのです。

⑤ 【講義】 実践報告
— 児童期及び成人期における支援の実際

資料なし